朝鮮通信使のこと

丸尾壽郎

椎名誠の短篇小説「蚊」を読むと、蚊にせめさいなまれた往時の記憶がよみがえってくる。文体も執拗に攻めつゞける蚊と、防戦に必死の、いら立つ神経の狂いに通じている。

戦後は蚊にも蚤にも虱にも悩まされることがほとんどなくなったが、戦前戦中、蚊は日常茶飯のことで、町家に住む私などは、夏の夕方は門前に水を打って涼み台を出し、蚊遣香と団扇で蚊を追いながら、浴衣がけで涼をとったものである。これが庶民の昔からの暮しであって、縁台、蚊いぶし、団扇、青蚊帳などはそれ故に俳諧や浮世絵の題材ともなった。今や鑑賞家はその涼味と情緒をしか言わないが、あの風情の向う側には、椎名の小説のように巨大な蚊柱が立ったり蚊に刺されて膚が赤く腫れ、痒さに血が出るほどボリボリとひっ掻く、いら立ちがあるのだ。

先年、岩波文庫の『老松堂日本行録』を読んでいたら、朝鮮回礼使の宋希璟が宿舎の深修庵で藪蚊に悩まされて録した詩に出会った。

黒身の蚊子南州に倍す　日ごと簾鉤に在り
屋頭に満つ　長喙膚を噬めば眠るを得ず
帳中に危坐し人をして駆わしむ

というのだが、序に深修庵は庭も堂内も一日中ものすごい藪蚊の大群が擾々として乱れ飛ぶので目もあけておれないと不快げに記している。修辞でなく事実だったろうと思う。深修庵は深い藪の中にある尼寺で、仁和寺心蓮院の東隣ということらしいが、朝鮮国の正使がこんな所に閉じ込められ、ろくな供膳も浴室もなく、「扶桑の酷熱」に耐えかねて「久客醺蒸されて白頭」になりそうな思いで、将軍義持との会見を二か月も捨ておかれていたのである。この冷遇ぶりに驚くが、なぜ義持はすぐにも会見しなかったのだろう。やはり応永の外寇の直後のこととて朝鮮国の真意を疑っていたのであろうか。

蚊がうるさくて眠れないという体験は、私にも切実なだけに深い同情を覚えるが、似たような詩に接したことがある。

もうひと昔も前、春四月に友人の史家と岡山に遊んで牛窓の経王山本蓮寺を訪れたことがあった。古い法華宗の寺で創建は一三四七年（正平二）と寺伝にあるが、本堂の棟木や番神堂東祠の天井板の墨書銘からは室町時代初期の建造で、四脚の中門は末期のものである。江戸時代には、その客殿（書院）が朝鮮通信使の宿舎にあてられ、日本の文人と漢詩の応酬が行われたし、秋祭りの唐子踊りのことも知りたくて訪ねたのだった。

あらかじめ許しは得ていたが、訪ねていくと、髪の長い美しい娘さんが出て来られた。来意を告げると、住職は急用で外出したが、通信使の遺墨の類は客殿に出しておいたから自由に観てくれとのことだった。拝観中に、娘さんがコーヒーをいれて持ってきてくださった。旅路の訪問先でコーヒーをふるまわれたのは始めてで、娘さんの好意がうれしく、春光の穏やかな港の眺望をたのしみながら、

ご馳走になった。あとで知ったが、住職が大のコーヒー党で来訪者には自ら豆をひいて馳走するのが楽しみなそうであった――。

客殿には四五本の掛軸が掛け連ねてあったが、その中に端正な文字で

牛頭寺古残僧少　翠竹蒼藤白日昏
宿客不眠過夜半　蚊雷殷々振重門

というのがあった。「隠」と書して「過客為妙上人題」とあるだけで誰の書とも、いつごろのものともわからない。唐詩に見るように「旅館寒灯独不眠」（高適）とか「江楓漁火対愁眠」（張継）とかいうのであれば、センチメンタルな詩情も覚えるのだろうが、蚊の羽音に悩まされて、客人が眠れずにいるというのがリアルで、身につまされるようでもあり、気の毒なようでもあって、なんとはなしにおかしかった。それにしても「蚊雷殷々として重門を振わす」という表現は凄絶で、やっぱり藪蚊だったろうかと思う。

朝鮮通信使も、やはり蚊に悩まされたろうに、さすがに詩は高尚で牛窓の風光や本蓮寺を詠じていて、書は達筆であった。

断山恰極浦　高処有叢林
獅子驚魔睡　龍孫聴唄音
諸天投客袂　初地見禅心
向夕蒲牢動　聊然話道襟

これには「辛卯菊秋三韓東郭」の落款がある。東郭は、製述官李礥（李重叔）の号、往路での作詩である。

本蓮寺　泣次　遺韵
異邦訪先躅　遺唾又秪林
毎觸傷情物　如聞在耳音
然吟未釋手　續和更得心
不盡鰲山涯　漣漣復満襟

来路訪寺時見寺前古松有志感一絶行忙未
及書贈故並録于左
但道前庵是本蓮　悠々往事問誰辺
盤桓手撫庭栢泣　樹老応経乙未年

これには「辛卯臘月下浣朝鮮国信史記室南聖重」の落款があって、往路は「行くに忙」がしく心にかかっていた作詩を、漸く帰路の十二月下旬になって果したことがわかる。両人とも「林、音、心、襟」の韻を踏み、遺韻と書いていること、南聖重の「樹老応経乙未年」の乙未の年が一六五五年であることから考えると、この年の通信使は正使趙珩、副使兪瑒、従事官南竜翼で、この三人が本蓮寺で作詩した詩の韻がこれだ。紙幅の都合でその詩は示せないが、辛卯年の使節が同じ寺で五十六年昔の先人を偲んで次韻したことがわかる。

辛卯年は一七一一年（正徳元）、李朝粛宗三七年で、正使趙泰億、副使任守幹、従事官李邦彦ら総勢五〇〇名の、将軍家宣襲職の祝慶を任務とする通信使が来た年である。

新井白石が朝鮮通信使の接遇の費用を倹約すべしとの趣旨から諸式改変を断行した年で、正使や対馬藩朝鮮方佐役をはじめて勤めた同じ木門の雨森芳洲らとの間に軋轢が生じた。のみならず、白石は寛永以後通例となっている将軍あての国書の称号「日本国大君殿下」を「日本国王」に改めさせ、あまつさえ国書の文中に光の文字があるのは将軍家光の諱をおかすものだと強弁して、国書の書き替えを迫った。趙泰億はこれに応じたため、帰国後、国威を損傷した罪で処罰されている。

次の己亥年（一七一九、享保四）の通信使の随員記録『海游録』を見ると、申維翰は、大学頭林信篤が、李重叔はどうしていますかと問うたのに対して、先年死にましたと答えると、信篤は顔色を失ったと記している。製述官として、国書の書き替えに関わったゆえの刑死であったろうか。

本蓮寺で私がみた遺墨の主だったものはこの位いである。辛卯年という文字を目にしたときの粛然たる思いは今も深い。